榆木小学校　学校通信
No.４５
なりたい自分になる！
PLUS ULTLA
令和７年３月１４日
文責　余宮

卒業式の練習も本格化。大切な節目を学校全体で盛り上げていきたいと思います。

巨人の肩に立つ

６年生の教室では、「榆木小学校への恩返し」という卒業プロジェクト議題が話し合われているようです。しばし耳を傾けてみたいと思います。話し合いでは、「草取り」とか「靴箱掃除」などの素敵なアイディアが提案されていました。各班では、その活動を≪時間≫と≪恩返し≫という視点で分析をしているようです。

「草取りは絶対に恩返しになるよね。その上、45 分で終わりそう。いいんじゃないの」

「ごみ拾いも恩返しにはなる。でもすぐ終わっちゃう？逆に無限に時間がかかる？」

個々の分析が発表されているその時、しほさん（仮名）が素敵な提案をします。

「あの…みんなの意見を聞いていたら…ごみ拾いと普段できない場所の掃除は、同じような活動だから合わせてやればいいと思います。どうですか？」

なるほど。それぞれの分析を聴きながら、活動内容や目的、時間などを考えてみると、一つの活動としてまとめたほうがよさそうと、個々の知をもとに新たな知を見出したのです。謙虚でありながら目からうろこの意見に、学級会が湧きます。なるほど、合わせるか～

アイザック・ニュートンが残したといわれる、こんな言葉を思い出しました。

「もし私が一層遠くを見渡せたとしたら、それはとりもなおさず巨人の肩に立ったからこそなのです」

これが、万有引力の法則を発見したことで有名なニュートンの言葉、というから驚きです。自身の功績は、自分自身のものではない。先人が探究してきたその発見や知識を伝える本や同僚とのやりとりのおかげがあってこそ　―その巨人の肩の上に立たせていただいたからこそ―　さらに一層遠くを見ることができた。

学ぶ人はどこまでも謙虚なのだと、改めて思います。

人は、自身の知識を確かなものだと錯覚するといわれます。自分は何でも知っているんだと思ってしまう。この通信でも話題にした「認知バイアス」などは、その典型的な例ですね。

ただ、人はそれほどなんでも知っているわけではない。例えば、日頃からよく目にする自転車。ハンドルとフレーム、サドルと車輪（２輪）だけ書いてある図に必要な部品を書き入れ、動く自転車にしてください※。皆さんも、すぐに読み進める前にご自身で自転車を試しに描いてみてはいかがでしょうか。

心理学を専攻するリバプール大学生相手に行われたこの実験、なんとほぼ半分が正しく図を仕上げることができなかったといいます。まず、最初の４種の部品以外に欠損している部品（少なくともペダルやチェーン、ペダルと後ろタイヤを繋ぐギアは不可欠）は何かが難しい。さらに、ついている場所やつなぎ方などに至っては…私は、まんまと間違えました。

こんなに知らないことだらけ。でも、私たちは知っていると勘違いしてしまう。

それなのに、知識に対して傲慢な態度をとってしまっている自分に、憤りを感じてしまいます。学びに不可欠なものは、どうやらというか、やはりというか、謙虚で慎み深く、それでいて勇気ある無知の自覚。だから、学びはコミュニティーの中で、協働的なかかわりでしか起こりえないのですね。そう、今回の６年生の学びのように。

【参考文献】スティーブン・スローマン,フィリップ・ファーンバック『知ってるつもり　無知の科学』早川書房.2021.